

時事評論

# 体験的 介護保険論

岡山県立大学教授

増田 雅暢



介護保険制度が実施されてから本年4月で13年が経過した。実施当初は、要介護認定が正しく行われるのか、利用契約制が機能するのか、民間事業者の参入によりサービスの質が低下しないのか、などさまざまな懸念が指摘された。しかし、その後の介護保険の実施状況を見ると、高齢者の生活に介護保険が定着し、要介護認定や介護保険給付の利用が一般化するとともに、介護事業がわが国の産業分野の重要な一分野となつてい

る。介護保険が社会に不可欠な存在になっている、と言つても過言ではない。

さて、2年前に筆者の母親が要介護者となり、介護保険のサービスを利用することとなつた。この個人的な体験から、介護保険制度の現状を評価してみたい。

## 手首の骨折から始まった

母親は、80歳の誕生日を過ぎた頃から、「高血圧が不安」、「耳鳴りがする」等の体調不良を訴えるようになった。高血圧といつても、以前から降圧剤の薬を飲んでい

ることもあり、平素は問題ないが、気になると1日に何回も血圧を測るようになった。

た。緊張すると170mmHgくらいになり、そうになると、大慌てでかかりつけの内科医を受診した。医者にかかる

とすると血圧が落ちていくというところが数回あったことから、内科医からは、心療内科を受診した方がよいのではな

## 入院中にケアマネジャーの訪問

いかに、と言われた。軽いうつ病または認知症が疑われた。大学付属病院で、脳MRIや長谷川式の認知症検査を受けることとなつたが、幸い認知症ではないと診断された。

また、毎日、「腰がだるい」ということを言うようになって、自転車乗りがこわくなって、歩行につえを使うようになって、やがて、シルバーカーを使うようになった。この時点で筋力強化のトレーニングなどを行

えばよかったかもしれないが、身近にそうした場所・機関がなかったし、要支援・要介護にならなければ、デイサービス・デイケアも利用できなかった。

82歳を過ぎた1月のある日、玄関先で、右手に回覧板、左手にシルバーカーを持って、歩き出そうとしたときに、バランスを崩して転倒、右手首を骨折した。直ちに、近くの病院に入院し、手術を受けた。

ランを作成した。  
右手首を動かすことができな  
いことから、ヘルパーさんに食  
事時の介助等をお願いすること  
となった。具体的には、朝食時、  
昼食時、夕食時にそれぞれ30分  
間食事介助、さらに週2回入浴  
介助をしていただく、というも  
のであった。

調理は私が行うこととなった  
が、ここで威力を発揮したのが  
民間企業による配食サービスで  
ある。冷凍した定食を1週間分  
ごとに自宅に届けてくれるとい  
うサービスで、高血圧者向けの  
減塩定食は1食770円。食べ  
るときには、電子レンジで解凍  
するだけ。栄養バランスがとれ  
ているし、試食をしてみると味  
も良かった。そこで、夕食はこ  
の冷凍定食に頼ることとした。

### 順調な在宅生活

退院直後の平日、市役所から  
訪問調査員が訪れて、母親の要  
介護認定調査が行われた。2月  
末に通知があり、要介護2と判

定された。退院後はリハビリの  
ために週2回程度通院しなければ  
ならないが、その送迎は、近  
くに住む退職したばかりの知人  
が引き受けてくれた。高さを調  
整できる特殊寝台を、福祉用具  
事業者から1か月3千円でレン  
タルした。

かくして、退院後の在宅生活  
が順調にスタートした。介護保  
険給付を受けた最初の1か月  
は、訪問介護回数が39回、保険  
給付額は10万6254円、利用  
者負担は1万1806円であつ  
た。翌月の3月は、訪問介護回  
数が46回、保険給付額は12万5  
064円、利用者負担は1万3  
896円。4月は、昼食時の介  
助はやめ、朝・夕食の介助が中  
心となり、訪問介護回数21回、  
保険給付額は7万578円、利  
用者負担は7842円であつ  
た。

### 介護保険の評価

もし介護保険がなかったら、  
と考えるとぞつとずつとする。筆者を

はじめ子どもたちは、介護に大  
わらわとなつたことだろう。介  
護保険を利用することにより、  
スマートに対応できた。

母親は日中独り暮らしであつ  
ても、ヘルパーによる食事・入  
浴介護に支えられ、安定的、健  
康な生活を送ることができた。

内閣府の「介護保険制度に関  
する世論調査」(平成22年9月調  
査)によれば、介護保険制度に  
より介護の状況が「良くなった  
と思う」人は13%、「どちらか  
といえば良くなったと思う人」  
は38%と、過半数の人は、制度  
導入後に介護の状況が改善され  
たと考えている。しかし、良く  
なつたと思わない人(「良くなつ  
たと思わない」17%と「どちら  
かといえば良くなつたとは思わ  
ない人」12%)も3割近くいる、  
という結果であつた。

しかし、この調査は、介護保  
険の利用の有無とは無関係に、  
全国20歳以上の者を無作為抽出  
で選んでいる。私の個人的な体  
験からいえば、介護保険の利用  
者に限って調査をすれば、「良

くなつた」とする意見の割合は  
もつと増えるのではないかと考  
えられる。

訪問介護の実態についてはい  
ろいろ批判があるが、今回の例  
のように1回30分で、朝・昼・  
夕と、1日3回食事介助は効果  
的であつた。一方、通所介護は、  
自分の時間の過ごし方や他の人  
たちとの会話が合わないなどの  
理由から、2回の利用で終わつ  
た。訪問介護1種類のケアプラ  
ンはケアマネジャーの手抜きで  
はないか、という意見があるが、  
これもケースバイケースであつ  
て、母親の場合は良かったよう  
だ。形式的な批判は空疎である。  
他方、通所介護は、昼食・入浴  
というマンネリズムのサービス  
になつていのではないか。

食事の宅配は、想像以上に介  
護生活を支えた。ヘルパーによ  
る調理サービスよりも社会的コ  
ストがかからないことから、介  
護保険で一部補助すれば、さら  
に普及していくとともに、訪問  
介護のコストを下げることにな  
るだろう。